

# 意味解釈の提示方法に関する談話間比較

## —other-speaker formulation のフレーム意味論分析—

西山 遥(慶應義塾大学大学院生)

### 1. はじめに

会話において、対話者の発言を、聞き手が表現形式を変えて再構成する現象を other-speaker formulation (cf. Heritage & Watson, 1979) とする。other-speaker formulation は、会話の機能的側面から数々の研究が行われてきた。しかしこの現象は、特定の制度的規範内の会話である制度的談話内で多く見られる一方、日常会話では事例が少ないとされる (Drew, 2003)。そのため、制度的談話の事例を用いて formulation の機能を特定の談話に質的に特徴づける研究は多いが、日常会話ではその研究自体が稀でその特徴も未だ明らかでない。

そこで本研究は、日常会話を含む様々な会話での other-speaker formulation の機能を明らかにすべく、その再構成方法についてフレーム意味論を用いて比較分析を行った。その結果、先行会話の再構成の方法が談話の種類によって一部異なることを論じる。

### 2. other-speaker formulation

other-speaker formulation (cf. Heritage & Watson, 1979) とは、会話において、話を聴いていた聞き手が、話し手の会話を再構成 (formulate) する現象であり、会話分析の分野でも関心を集めてきた。定型表現はないが、“you’ re saying is…” や “so you are telling me…” のように、say や tell など発言・思考を表す動詞や文頭の接続詞の so などは、相手の発話に言及する表現として用いられやすいことから、formulation でも使用されることが多い (Couper-Kuhlen & Selting, 2017, p. 85)。これらの表現から分かるように formulation は先行会話を言い換える性質を持つが、言い換えとは完全に同一ではなく、先行会話と全く同じ意味を表すというよりも、言い換え・要約・明示化・抽象化などの様々な意味操作を伴っている (Heritage & Watson, 1979)。

こうした other-speaker formulation はとりわけ制度的談話、例えばニュースインタビューでの質問者と返答者の会話 (Heritage, 1985) やセラピーでの医師と患者の会話 (Deppermann, 2011) など、日常会話とは異なる限定的な文脈で行われる会話を対象に研究されてきた。また、Drew (2003) は、日常会話には事例が少ないことを観察し、日常会話には formulation を使用するような活動が限られていることが原因と示唆した。更に Drew は、制度的談話の中でも異なる会話状況では formulation は異なる機能を持つと考え、セラピー、ラジオ番組内の電話、ニュースインタビュー、ビジネスでの交渉に見られた formulation の違いを各会話の流れから質的に分析している。

本研究では、多様な状況の会話、特に日常会話から other-speaker formulation に該当する現象を集め、聞き手が formulation を生成する方法について分類による分析を行った。この際、各制度的談話の目的に沿った formulation 方法を探ることを目的とした Drew (2003) よりも客観的な分類を求め、会話の流れや機能が異なる多種類の談話を意味操作の観点から同一の基準で客観的に分析するために、次章で説明するフレーム意味論を用いた。

### 3. 方法論

#### 3.1. フレーム意味論

分析では 2 つの理由によりフレーム意味論 (Fillmore, 1982; 1985; Fillmore & Atkins, 1992) を採用した。まずフレーム意味論は、上記で軽く触れた様に、会話の流れや機能が異なる多種類の談話に対し、使用される言葉の意味を、文章中の使用語句が喚起するフレームという一貫した方法で分析できるという点が理由である。フレーム意味論では、話者は自らの言語経験から、特定の語彙に遭遇すると特定の背景知識を想起する、と考える。例えば、buy, sell, pay などの動詞は、買い物という行為およびそれに関わる背景知識 (商業取引フレーム) を読者に想起させる。つまり、会話の種類に関わらず、特定の語彙が特定の文脈内で使用されていればその語彙が特定のフレームを喚起していると判断でき、客

観的に分析することができる。

次にフレーム意味論は, formulation と先行会話のような, 意味的に関連するが異なる 2 つの発話について, 各々が喚起するフレームの相違やフレーム間関係から意味論的分析が可能とされる (Hasegawa et al., 2011). 例えば Hasegawa et al. (2011) は, 言い換え表現のペアが喚起するフレーム同士について, 異なる語彙が同じフレームを喚起する場合や, 異なるフレームが喚起されるがそれらがフレーム間関係により結び付けられる場合によって説明できると指摘した。

[They]<sub>AUTHORITIES</sub> are going to INCARCERATE [him]<sub>PRISONER</sub>.

[They]<sub>AGENT</sub> are going to CONFINE [him]<sub>THEME</sub> [to prison]<sub>HOLDING\_LOCATION</sub>.

(Hasegawa et al., 2011, p. 110)

上の 2 文は, 言い換え表現のペアであり同様の意味を表すが, 前者は incarcerate が Imprisonment フレーム, 後者は confine が Inhibit\_movement フレームを喚起する。両者は, 前者が具体的, 後者が抽象的なフレームであり, 抽象度が異なる継承関係というフレーム間関係にあると言える。従って, 本研究では, この言い換え表現のペアの分析を, 話し手の会話とそれを聞き手が再提示した other-speaker formulation とのペアの分析に応用し, ペアが喚起するフレームの相違やフレーム間関係から, 先行会話と再構成後の意味の相違および関係性を分析した。

### 3.2. 会話データと分析手順

データ源として, アメリカ英語の自然会話コーパスである Santa Barbara Corpus of Spoken American English から会話 50 本を用いた。その会話の種類の内訳としては, 日常会話が半数以上と多くを占めた。詳細を表 1 に示す。

表 1. 会話データ

会話の種類	本数
日常会話	28
職場・同業者間	5
業者と顧客の会話	5
その他 (授業および授業中の議論, 説明会, 説教など)	12

分析手順としては, まず 50 本の会話の中から先行会話と other-speaker formulation のペアを抽出した。その後, FrameNet<sup>1</sup> (web 上のフレーム検索プログラム) を適宜参考にしながら, formulation や先行会話で使用される語句, 表現が喚起するフレームを特定し, フレームの相違, つまり, 両者が喚起するフレームは同じか, 異なる場合はどのフレーム間関係 (継承関係, 因果関係など) にあるかを分析した。この際, FrameNet 上に既存するフレーム間関係に加え, 会話の文脈上成り立つフレーム間関係も考慮に入れた。その後, 質的量的な混合分析用のソフトウェア (MAXQDA) を使用し, 各 formulation について会話の種類 (家族や友達間の会話, 職場での同業者の会話, 業者と顧客の会話など) を分類し, フレームの相違や関係性の分類との相関関係を分析した。

## 4. 結果と分析

今回収集した 50 本の会話から 141 件の other-speaker formulation が確認できた。下の表は, 収集した formulation で使用されていたフレームが, 先行会話で使用されたフレームとどのような関係にあるかを, 主な談話の種類ごとに示したものである。表内の数字は件数を示し, 括弧内の数字はその会話分類内での件数全体で各フレームを割った割合である。1 つの formulation が複数のフレームを持ち, 先行会話のフレームとの関係性が異なる場合 (例えば, formulation が先行会話と同じフレームと, 異なるがフレーム間関係にあるフレームを, 両方使用している場合) は, 該当する各分類に 1 件ずつ追加した。

表 2. formulation と先行会話フレームの関係性

会話の種類 フレーム	全体 141 件	日常会話 107 件	職場・同業者間 11 件	業者と顧客の会話 13 件	
				業者発話 10 件	顧客発話 3 件
同じフレーム	85 (60%)	64 (60%)	5 (45%)	8 (80%)	1 (33%)
異なるフレーム					
Inheritance	14 (10%)	10 (9%)	3 (27%)	0 (0%)	0 (0%)

<sup>1</sup> <https://framenet.icsi.berkeley.edu/fndrupal/>

Perspective_on	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)
Using	15 (11%)	12 (11%)	1 (9%)	1 (10%)	1 (33%)
Subframe	1 (1%)	1 (1%)	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)
Precedes	10 (7%)	9 (8%)	1 (9%)	0 (0%)	0 (0%)
Causative_of	26 (18%)	23 (21%)	0 (0%)	2 (20%)	1 (33%)
Inchoative_of	6 (4%)	4 (4%)	2 (18%)	0 (0%)	0 (0%)

その結果、全体としては先行会話と formulation が同じフレームを喚起するケースが多く、全体の半数以上で確認された。全体の多くを日常会話での formulation が占めたため、日常会話でも同じフレームの場合が同様に多かった。日常会話に特徴的な点としては、以下のような因果関係(Causative\_of relation)によるフレーム間関係が見られたことである。

断片(1) [SBCSAE03]

- 01 \*MARI: Well actually I have Trader Joe's whipped garlic bread spread.
- 02 \*ROY: Oh boy.
- 03 \*MARI: Oo.
- 04 \*ROY: So we can dispense with the garlic and the butter.

断片(1)は料理中の友人間の会話であるが、ここでは、料理に使うスプレッドを購入済だという先行会話(01)に対する聞き手の発話“So we can dispense with the garlic and butter.”(04)が formulation に該当し、先行会話の内容 (Possession フレーム) を原因としそこから導かれる結果 (Forgo フレーム) を示すことが分かる。このような因果関係は日常会話以外ではほとんど見られなかった。

一方、業者と顧客の会話の内、業者が顧客の発言を再構成する状況では、同じフレームを喚起する割合が 10 件中 8 件と極めて高かった。以下の断片(2)は、カセットデッキを買いに来た客 (TAMM) と売り場の担当者 (BRAD) との会話である。

断片(2) [SBCSAE16]

- 01 \*TAMM: and I think I want a tape deck with two places for two tapes so I can copy.
- (中略)
- 02 \*BRAD: Would you
- 03 \*BRAD: you would want the the ability of the double cassette deck just purely for taping from one tape
- 04 to the other?

TAMM が述べた商品の希望について、聞き手であった BRAD が 03-04 で内容を再度まとめており、先行会話の動詞(01)と同じ“want”(04)が Desiring フレームを喚起している。つまり formulation が先行会話と同じフレームを喚起していると言える。(同時に、“copy”(01)が喚起する Duplication フレームが“tape”(03)により Recording フレームに言い換えられているが、これらは Recording が Duplication の原因と捉えられ因果関係で説明できる。)このような同じフレームの使用による formulation が、業者と顧客の会話、特に業者が顧客の発言を再構成する文脈で、多く見られた。

更に職場での同業者の会話では、同じフレームを使用する事例は減少し、因果関係以外のフレーム間関係が散見された。例えば、次の例は飛行機のパイロットの上司(RAND)が新人(LANC)に滑走路の選択についてアドバイスをする場面である。

断片(3) [SBCSAE22]

- 01 \*RAND: Well the sequence can't be too bad.
- 02 \*RAND: When you got
- 03 \*RAND: when you can feed from charley
- 04 \*LANC: xxx.
- 05 \*RAND: and from bravo and from alpha.
- 06 \*RAND: You know the sequence can't be too bad
- 07 I mean all he did.

LANCは自分が受けたアドバイスを08行目でまとめているが、先行会話ではSupply フレーム(03行目“feed”が喚起)で具体的だった内容を、抽象的なIntentionally\_act フレーム(“do”(08)が喚起)で再提示している。つまり、この事例は抽象度の異なる継承関係というフレーム間関係によって意味操作をしたformulationだと言える。

上記の結果から、聞き手が示す解釈は、談話内の対話者の関係性や許容される推論の程度によって異なると考えられる。業者が顧客の発話に寄り添うことを前提とする業者顧客間の会話では、同じフレームで大凡の意味を変えずに解釈を提示する傾向が強い。一方で、同業者の職場での会話のように、専門性レベルが同程度に高い対話者の中では、文字通りよりも関連しているフレーム同士という間接的な解釈方法で意味を再提示する割合が多い。Sacks(1992)によれば、聞き手の反応として、先行会話の言い換えや変形の提示は、先行会話の繰り返し表現の提示よりも、解釈の提示として曖昧でないと言う。つまり、職場・同業者間では、間接的な解釈方法によって、聞き手の深い理解を表すことが好まれている可能性がある。更に日常会話では、聞き手の返答として多様な方法があるが、相手の会話内容に基づきながらも、因果関係というある種推論的な意味解釈が、他の談話に比べとりわけ許容されていると考えられる。このように、formulationには多様な方法があるが、談話の種類によって好まれる方法が一部異なっており、そこには談話の種類によって聞き手の役割が異なっているということが関与していると推察される。

## 5. 結論

本研究では、フレーム意味論を用い、会話内の先行会話とそのother-speaker formulationとが喚起するフレームを調査した結果、表2に示したようなフレームに関わる多様な方法が確認された。更に、談話間でその使用傾向を比較した結果、談話内の対話者の関係性や聞き手の役割によって、聞き手が解釈を提示する方法が一部異なることが示唆された。

しかしながら、今回の調査では談話間の集計数に大きな差があった。日常会話からも多くのother-speaker formulationが収集できたことは注目すべき点であるが、今後は日常会話以外のformulationの特徴をより明確にすべく、日常会話以外のデータを同数程度まで増やすことが求められる。また、日常会話という1つの分類内にも、細かいレベルで見れば、会話文脈上複数のパターンがあり、そのパターンが解釈の提示方法の選択に影響を及ぼしている可能性がある。そのため、データの追加に加え、よりマクロなレベルでの分類の再編成を検討することで、解釈提示方法およびその機能は更に明らかになるだろう。

## 参考文献

- Couper-Kuhlen, E., & Selting, M. (2017). Formulating and formulations. *Interactional linguistics: Studying language in social interaction*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Deppermann, A. (2011). Notionalization: The transformation of descriptions into categorizations. *Human Studies*, 34(2), 155-181.
- Drew, P. (2003). Comparative analysis of talk-in-interaction in different institutional settings. In P. Glenn, C. LeBaron, & J. Mandelbaum (Eds.), *Studies in language and social interaction*, pp. 293-308. Mahwah: Lawrence Erlbaum Associates.
- Fillmore, C. J. (1982). Frame semantics. In Linguistic Society of Korea (Ed.), *Linguistics in the morning calm* pp. 111-137. Seoul: Hanshin.
- Fillmore, C. J. (1985). Frames and the semantics of understanding. *Quaderni di semantica*, 6(2), 222-254.
- Fillmore, C. J., & Atkins, B. T. (1992). Toward a frame-based lexicon: The semantics of RISK and its neighbors. In A. Lehrer & E. F. Kittay (Eds.), *Frames, fields, and contrasts: New essays in semantic and lexical organization*. pp. 75-102. Mahwah: Lawrence Erlbaum Associates.
- Hasegawa, Y., Lee-Goldman, R., Kong, A., & Akita, K. (2011). FrameNet as a resource for paraphrase research. *Constructions and Frames*, 3(1), 104-127.
- Heritage, J., & Watson, D. R. (1979). Formulations as conversational objects. In G. Psathas (Ed.), *Everyday language: Studies in ethnomethodology*, pp. 123-162. New York: Irvington.
- Sacks, H. (1992). Sound shifts; Showing understanding; Dealing with ‘utterance completion;’ Practical mysticism. In G. Jefferson (Ed.), *Lectures on conversation: Volume II* (pp. 137- 149). Oxford: Blackwell.